

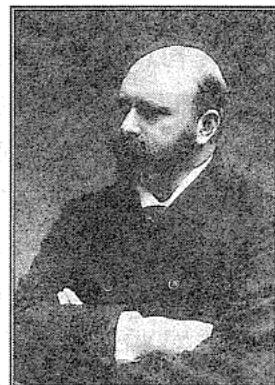
特集 **工作教育の歩み**

## スウェーデンにおける教育的工作(教育的スロイド) の誕生とその後の展開

1. スウェーデン語のスロイド (Slöjd) という言葉は元来「器用な人」をスロイダレ (Slöjdare) と呼んでいたことと関連している。スウェーデン・デンマーク・ノルウェーは中世においてはヴァイキングとしてヨーロッパ各国との交易やときには略奪をおこなったことで知られている。ヴァイキングは日常生活においては農民であった<sup>(1)</sup>。北欧に住む農民の住居形態は、散居といわれ、点在して住んでいた。そこで、かれらは生活や生産にかかわるものが多くは自分たちで製作して暮らしてきた。この伝統は19世紀に至るまで農民の生活の中に生き続けてきたが、その伝統を、民衆を対象とする学校教育の中に導入し、今日に至るまで(約140年) 普通教育のなかで実践されてきたのが、スロイド教科である。

2. スウェーデンにおいて、1870年代半ばにおいて当初はスロイド学校という形態で多くのスロイド教育は実践されたが、このときは必ずしも普通教育として実践されたわけではなかった。ストックホルムやヨーテボリのような都市部では、1880年代までは職人によってさまざまな手工(例えば金工や製本など)が職業教育として教えられていた<sup>(2)</sup>。このような性格をもつスロイド教育を大きく転換させたのが、オットー・

サロモンである。彼はスロイド教育の教材を木工に限定し、1882年にはモデルシリーズと呼ばれる一群の教材集を完成させた。



オットー・サロモン  
(50歳当時)

さらに、それをネースでのスロイド教員養成所での講習会において参加者との討論などによって発展させていった<sup>(3)</sup>。ここに「教育的スロイド」が誕生したと考えられる。「教育的スロイド」とサロモンが名付けた理由にはさまざまなことが考えられるが、なによりもスロイド教育の目的を道具の正しい使用法に関する技能を教えることだけではなく、「形式的陶冶」においてことと関連している。それは具体的には以下のようなものである<sup>(4)</sup>。

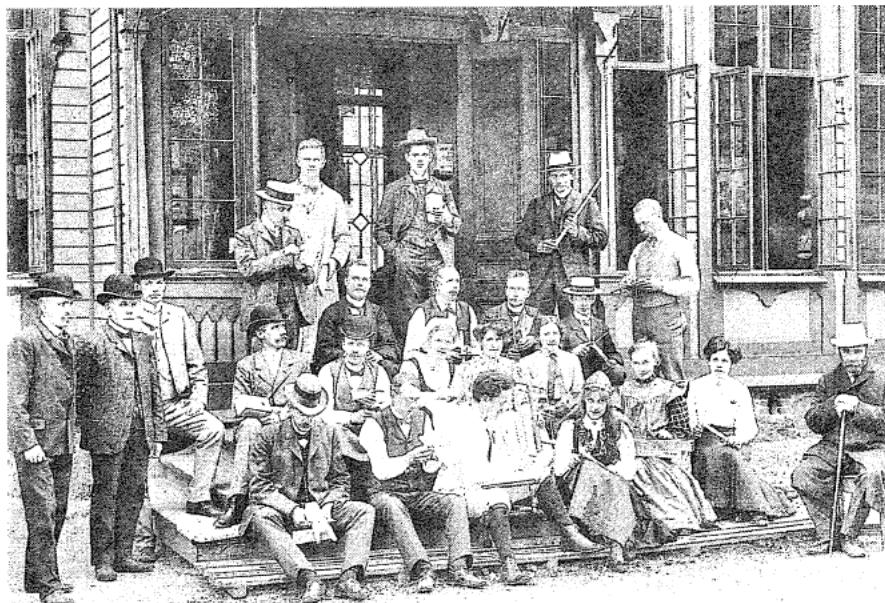
「一般的に労働への嗜好と愛を育てる」と、肉体労働への敬意を育てること、自己活動を発達させること、秩序、几帳面さ、清潔さ、整理整頓に慣れさせること、注意深

さを発達させること、勤勉さや忍耐強さに慣れさせること、体力の発達に作用すること、眼を訓練し、形態感覚を発達させること、関連した一般的技能を育てること」

その後サロモンは1887年頃から「練習」という作業の共通要素を見出し、それを基礎としてモデルシリーズを編成するようになった。これらのモデルシリーズはネースのスロイド講習会を通じて国際的に各国の手工教育に影響を与えた。

3. 1880年代後半以降に「教育的スロイド」を教えたのは、職人ではなく、国民学校教師であった。サロモン自身も国民学校教師がスロイドを教えることを望んでいた。サロモンの死後（1907年）、ネースのモデルシリーズに対する批判（子どもの創造性や想像性の欠落という批判）<sup>クリエイティビティ ファンタジー</sup>もあり、ネースのモデルシリーズの国際的な影響力は次

第に失われていった。スウェーデン国内では、その後もモデルシリーズは改訂され、1950年代まで使われていた。ネースのスロイド教員養成所では、サロモンが生きていた時代には年間4、5回開催された講習会は1919年頃から夏期のみに開催されるようになった。また、その夏期講習会の受講生は国民学校教師が少なくなり、職人経験者が多くを占めるようになっていった。また、1950年代半ばには、国民学校教員組合との合意により、学校教員の労働時間数を減少させるためにスロイドは専科教員にまかされることになった<sup>⑤</sup>。また、1960年からリンクショーピングにおいてスロイド教員養成所が職人経験者を対象とした1年制の課程としてはじめられた。それ以前には木工・金工スロイドの教員養成コースはネースの夏期講習会しか存在しなかった。その夏期講習会も1966年には幕を閉じた。



1906年の夏期コース（木工）の参加者  
右端はサロモン、参加者はモデルシリーズの各作品を手にもっている

4. 1962年にそれ以前の複線型学校制度が廃止され、9年間に義務教育が延長され、それを担う基礎学校 (Grundskolan) 制度が新たに発足した。スロイド教科の性格はこのときから、大きく変化する。「1960年代以降のスロイド教科は創造的活動にねらいをおき、その目的は生徒が作業する材料を使って個性的な表現を見いだすように刺激することに」おかれりようになった<sup>(6)</sup>。1962年のレーロプラン（日本の学習指導要領に相当する）にも同様の趣旨が書かれているが、このときからスロイド教科は「美的教育 (estetisk fostran)」をになう教科としての性格が強化され<sup>(7)</sup>、このような性格づけは今まで続いている。

5. 最後にスロイド教科の現状についてふれておく。現在のスウェーデンの「指導計画と評価基準 (kursplaner och betygsskrifter) 2000」（日本の学習指導要領と指導要録とを合わせたものに相当する）では、スロイド教科の目的は次のように規定されている<sup>(8)</sup>。

「教科スロイドは生徒の創造的 (skapande) 能力、手工作業的 (manuella) 能力、コミュニケーション的能力の鍛磨を通じて生徒の全面発達に寄与する。」

スロイド教科は手工作業 (manuellt arbete) と知的作業を統一的に含んでおり、創造性、好奇心、責任感、自立性、問題解決能力を発達させる。それは、アイデアに始まり、完成したモノにいたるプロセス (スロイドプロセス) に表現される。テキスタイル、木工・金工スロイドは、生徒が彼ら自身の能力への信頼を強化し、日常生活

での問題に対処するための準備を与える知識を発達させることである。

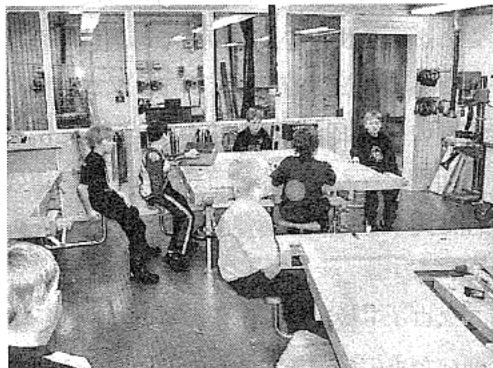
「デザインと機能を評価し、判断することは、日常生活において頻繁に必要とされる。スロイドの教育は美的 (estetiska) 値値についての意識を創り出すこと、材料の選択や加工、設計がいかに製作物の機能と耐久性に影響を及ぼすかについての理解を発達させることを目的としている。スロイドの教育のなかで、環境問題や安全問題に関する知識を与え、資源を節約することの重要性に関する意識を涵養することも目的としている。」

スロイド教科は、新しい思考や新しい創造のための基礎をすることになる。この教育は、過去と現在のスロイドの伝統に関する知識を通して、生活史や平等問題への見識を与えることになる。スロイド教科は、より広い視点から多様な文化の手工 (hantverk) の伝統に関する自覚を創造することも目的としている。」

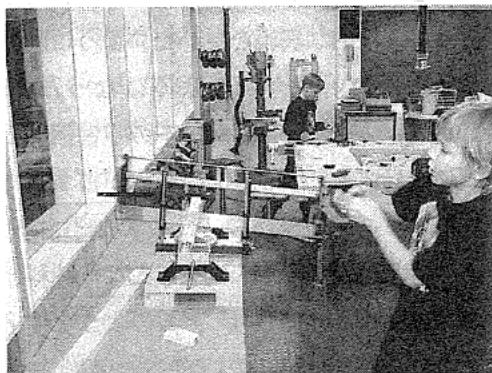
この目的規定には、スウェーデンのスロイド教科の120年以上に及ぶ歴史が反映しているように思われる。学校ではスロイドの授業は、第3学年から第7学年まで木や金属などの固い材料を扱う木工・金工スロイドと布などの柔らかい材料を扱うテキスタイル・スロイドの2種類のものが実施されている<sup>(9)</sup>。これらの学年では、クラスを半分に分け(半学級)、生徒は前期と後期で両方の授業を交代して受ける。したがって、スロイド担当教師（現在ではテキスタイル・スロイドと木工・金工スロイドの2種類の専科教員）は15名をこえて授業をおこなうことではない。さらに第8学年と第9学

年では、木工・金工スロイド、テキスタイル・スロイド、体育、音楽、美術（Bild）、技術（Teknik）などの教科のなかから生徒が選択する。筆者は、2003年10月からストックホルム郊外にあるテービイ（Täby）という町にあるネースピィーダール中学校

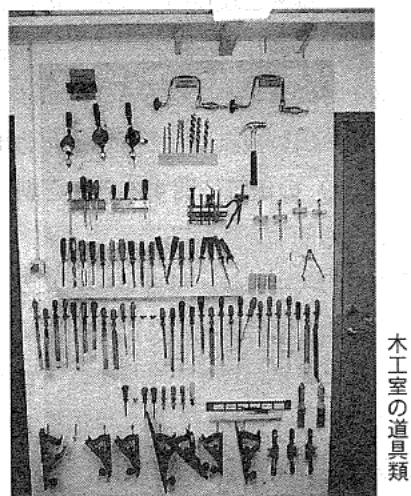
（Näsbydal skolan）に毎週月曜日の午前に行われているスロイドの授業を見学したが、そこでの授業内容や実習材料や道具や設備などは日本と比較してかなり充実しており、生徒はものをつくることを通してスウェーデンの伝統的な手工（Hantverk, Hemslöjd）



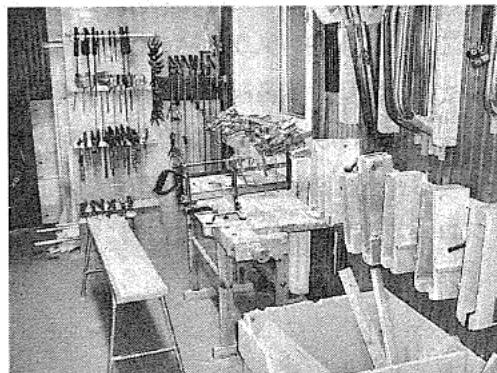
木工スロイドの授業の様子



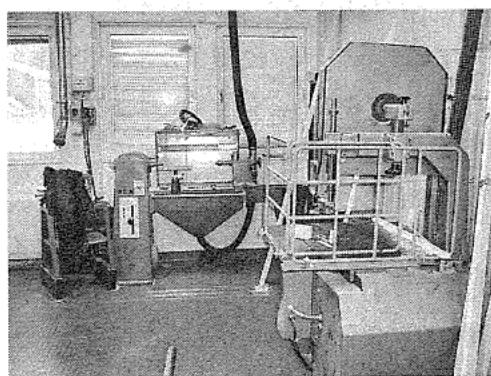
木工スロイドの授業の様子



木工室の道具類



木工室の道具類



木工室の機械（木工旋盤など）



テキスタイル・スロイドの授業の様子

の文化を学んでいるという印象を受けた。筆者が2004年2月に訪問したウメオ市郊外の学校のスロイドの授業の様子を撮影した写真を掲げておく（前ページ参照）。

(注)

- (1) 熊野聰『ヴァイキングの経済学——略奪・贈与・交易』山川出版社、2003年
- (2) 「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第52巻第2号、2006年3月、1頁-27頁。
- (3) 「オットー・サロモンによるスロイドのモデルシリーズの形成と発展」『日本産業教育学会紀要』第37巻第1号、2007年1月
- (4) 「オットー・サロモンのスロイド教育システムのテーゼ」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第53巻第1号、2006年9月

- (5) ストックホルム市のスロイド担当視学官であったハリー・アービッドソン氏への筆者による聞き取り。
- (6) Sven Hartman "Lärare kunskap" s.104-105, 1994
- (7) このような性格は、モデルシリーズの否定と関連して登場してきたことは興味深いことである。1962年のレーロプランには以下のように書かれている。「スロイドの授業は常によく計画されなければならないとしても、それはモデルシリーズと結びつけられてはならず、一人一人の条件にあったものにする必要がある。」("Läroplan för grundskolan"s.329, 1962)
- (8) Skolverket "Grundskolan kursplaner och betygskriteier 2000" s.91, 2000
- (9) 新自由主義の考え方による教育改革によって1989年から中央集権的なコントロールが緩和され、学校にカリキュラム編成権が委譲され、到達目標への達成状況だけを学校教育局 (skolverket) が管理するようになった。各教科の年間時間数の配分については実際には学校によって異なっている。